
仮面ライダーディケイド ~THE NEXT DECADE~

大木菜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド ～THE NEXT DECADE～

【Nコード】

N24120

【作者名】

大木菜月

【あらすじ】

MOVIE大戦後、元の姿に戻った門矢士たちとその仲間^{かどやつかさ}は次なる世界へと向かった。

鳴滝の正体はいったい何なのか・・・

そして徐々に姿を現す謎の組織と新たな完全悪ライダー！

そのライダーの腰に巻かれたディケイドライバーのようなものと、メモリスロット？

一体誰が変身しているのか？何が目的なのか？

今士たちの旅がFINALを迎える。

本編の続編、THE NEXT DECADEなディケイドを解く
とご覧あれ！！

なお、本編は完全無視な感じで進めていきたいと思います。
ディケイド好き、ライダー好き、特撮好きの方はぜひ読んでくださ
い！

ディケイド 新たなる伝説

MOVIE大戦後、元の姿に戻った門矢士たちとその仲間かどやつかさは次なる世界へと向かった。

鳴滝の正体はいったい何なのか・・・

そして徐々に姿を現す謎の組織と新たな完全悪ライダー！

そのライダーの腰に巻かれたディケイドライバーのようなものと、メモリスロット？

一体誰が変身しているのか？何が目的なのか？

今士たちの旅がFINALを迎える。

本編の続編、THE NEXT DECADEなディケイドを解く
とご覧あれ！！

なお、本編は完全無視な感じで進めていきたいと思います。

ディケイド好き、ライダー好き、特撮好きの方はぜひ読んでください！

キャラクター紹介・設定

キャラクター紹介

門矢士 かどやつかさ

仮面ライダーディケイドになる人物。主人公

本編と変わらない性格・口癖。

まだ旅が続いている理由は分かっていない。

そしてこの世界にも

撮られたがっていないらしい。

今も写真館に居候。

光夏海 ひかりなつみ

士の理解者で仮面ライダーディケイドのヒロイン。

栄次郎の孫。写真館に住んでいる。

士からの呼び名は夏ミカン。

海東からは夏メロン。

小野寺ユウスケ（おのであゆすけ） クウガの世界の仮面ライダークウガ。

士達と旅をする。姉さんを殺

された。

笑顔のために戦う。

海東大樹 かいとうだいき

よく分からない性格。怪盗。

士の記憶をなくす前を唯一知っている

人物。

ディエンドライバーで、ディエンドに

変身する。

一人で世界を超えられる。

光栄次郎（光栄次郎） 夏海の祖父。

一度ディケイドと戦った死神博士らしい・・・
イカでビルというくだらない洒落で、イカ

デビルに変身した。

士達に名言などを放つ良き老人。

なるたき
鳴滝 本当に分らない存在。

何のために、どうしているのか・・・いちばん
作品に愛されてない人。

他世界から悪ライダーを呼んできては、ディケイ

ド等を襲撃。

しかし夏海を救ったりと意味が分からない。

止めてほしいのか、破壊してほしいのか・・・

世界観

MOVIE大戦の次の世界。

だれの世界なのか、何の世界なのかよく分からない世界。

士の衣装も変化を遂げない。

また、各世界のライダーがごちゃごちゃしているためにさらにわけ
がわからなくなっている。

鳴滝の立ち位置

今回は完全な悪として、仮面ライダーを倒す側として登場させます。
いろいろと概念あるキャラクターですが、悪にさせていただきます。

プロローグ

デイケイドはハッピーエンドを迎えるかに思われた。

しかし、張ったまんまの伏線。それを回収しきれてはいなかった。

まあ、この小説でも回収しきれないわけではないのだが・・・

現に鳴滝とは一体何だったんだろうか？

本当に、全く騒がしいだけで終わった気がする。

よって、この話は鳴滝がもし完全に悪だったら・・・という空想話を小説にしたものである。

それを承知の上に、この小説を読んでいただきたい。

さあ、あなたもこれから始まるデイケイドの旅の、御一行になってみてはいかがだろうか？

第一話 新たなる旅・夢

寝静まった夜。

写真館の中でもその光景は同じだった。

時計の秒針だけが動き続けている。

士は深い眠りについていて。そのせいか、気付くと夢を見ていた。・
いくつもの地球が融合を止め、分裂していく中、一人の男が暗闇から顔を出した。

「鳴滝・・・どうしてここに？」

「デイケイド、貴様の旅は続く。次の世界で会おう・・・」
と言い残し、真っ暗な暗闇から突然に現れるオーロラに消えていった。

ゆっくりと目を開ける・・・

辺りは薄明るくなっていた。立ち上がり、何かが違うことに気がついた。

ロールの絵が、真っ直ぐな道の絵からライダーが無数に現れ、黒い形なきものと

戦っている絵に変わっていた。

そしてそれを見ている一人の男も描かれていた。

「だれが変えたんだい？」

声を聞いて後ろを振り向くと、海東大樹が立っていた。

「さあな、このロールのこの男、何を見てるんだ？」

なぞるようにして海東は男の絵に手を当てた。

二人とも大体の見当はついていてしたが、それを口にはしなかった。分らないがいやな予感を二人は察知していた。

「・・・あれ？どうしたの？」

ユウスケは寝ぼけ眼をこすり、ドアから現れた。

一連を説明するとユウスケも、その男の絵を見ていた。どうやら察したらしい。

「これって・・・鳴滝さんか？」

「やっぱりな、どこかで見たことあったんだ」

と同時に、先程の夢を思い出した。

次の世界で会おう、ん？と言わんばかりに外に飛び出した士。

ドアを開けるとまだ完全に朝日は差し込んでおらず、風も少し吹いていた。

士の前に広がっていた光景・・・それは荒れ果てた地、ビルが倒壊している光景だった。

「こんな世界、今まで一度も見たことないね」

旅の先輩であるう海東も口をそれ以降閉じるほどだった。

「士くん・・・どうなってるんですか？朝起きて外を見たら。。。」

慌てた様子の夏海に冷静な士。

「さあな、分からないが新しい世界に来てしまったみたいだ」

四人は自分達の前にある光景に言葉を出せなくなっていた。

第一話 新たなる旅・夢2（前書き）

細切れでこれからは投稿していくのでよろしくです。

第一話 新たなる旅・夢2

外の様子の変貌に驚きを隠せないまま、写真館に戻ると栄次郎がコーヒーを入れていた。

座ってそれを飲む四人。栄次郎は浮かかない顔の四人へ質問した。

「このロールの絵は一体誰が変えたのかな？」

「分からないんです。それが」

ユウスケは飲んだコーヒーカップをテーブルに置いた。

どうやら舌をやけどしたらしい。

「そうか・・・また旅を続けるということなんだね」

栄次郎もコーヒーを一杯そそった。

海東は無言のまま立ち上がり、ディエンドライバーを持ってドアを開けて外へ出た。

土もゆつくりと立ち上がり、海東を追うように外へ出た。

「ちよっ・・・大樹さんも、土もまってよ」

おいてかれたユウスケも、急いで後を追いかけた。続いて夏海も。

「行つてらっしゃい」

栄次郎は四人の背中を見て、笑顔で言った。

く写真館周辺の外く

ビルのがれきや石ころが転がっている。

こうして見ると無傷のままの写真館がぼつんとあるだけで違和感があった。

「土、ここはどこの世界か探す必要があるんじゃないか？」

ユウスケは土へ言った。

土もそれを考えていたため、頷いた。

海東が先頭に立ち、ゆつくりと歩き始めた時だった。

「うはあっ！」

荒廃ビルの影から飛ばされて転がりやってきたのは、赤きライダー

だった。

「龍騎？この世界は龍騎の世界なのか？」

「いいや・・・違うらしいな」

と言ったのは士で、理由はすぐそこにあった。

影から出てきたのは、仮面ライダーオーガ。

倒れている龍騎の首をつかみ持ち上げる。

「くっ・・・どうしてライダー同士が戦わなきゃいけないんだ・・・
今こそ

力を合わせて戦うべきじゃないのか・・・？ぐはっ！」

立つ力すら残ってない龍騎。立とうとしても脚が言うことを聞かない。

士はドライバーを構え、カードを体の正面へ持ってくる。

「この世界は何の世界か分からないな、でもこいつと戦う必要はあるみたいだぜ！

変身！」

ライダーオーナメントが士をつかみこみ、マゼンタのディケイドが現れた。

目は激情態ではないので一安心だった。

ライドブツカーをソードモードにして、早速戦闘が始まった。

「ハアアア！」

オ ガストランザーとブツカーのぶつかり合う斬撃音が響き渡る。

写真館はすぐそこに見えている。

隙をついたディケイドの突きが、オーガの右肩に命中する。

持っていたストランザーを吹き飛ばされ、攻撃をかわしながら、ストランザーを拾う。

「・・・」

どんな攻撃をしても全く言葉を発さないオ ガが奇妙に映る。
ミッシヨンメモリーを差し込み、ストランザーは銃型に変形。

「銃なら銃だ！」

「ATTACK RIDE ブラスト！」

銃弾は確実にオーガをとらえている。

しかし相手はレーザーを銃口から放ち、ディケイドへ。

「っく！」

攻撃を喰らったディケイドはのけぞる。

だがまだレーザー攻撃は続き、その咆哮は写真館へ向かった。

僅かながらだが写真館へ伸びて行くレーザー。

「そうはさせないよ！」

「ATTACK RIDE バリア！」

気付けばディエンドに変わっていた海東は、バリアでレーザーを防いだ。

「全く土もまだだな」

海東もドライバーをオーガに向けて走っていった。

第一話 新たなる旅・夢3

「すまないな、海東。借りは返すぜ！」

デイエンドはオーガと激しい肉弾戦を繰り広げている。

しかし一向に相手にひるむ気配はない。

それどころかデイエンドの首をつかみあげようとしていた。

だが、今度はデイケイドがフォローするように、全身体当たりで動きを食い止めた。

「借りは返したぞ。海東」

「すまない、土。じゃあそろそろとどめを刺そうか」

両者は見合わせて頷いた。

デイケイドはブッカーガンモードを構え、デイエンドはドライバーを相手に向けた。

「FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEC
ADE！」

「FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DIE
ND！」

十枚のカードがデイケイドの前に現れる。

続いてデイエンドも円状のカードが次々と現れる。

二人はあのアポロガイストの戦い同様、息をそろえてトリガーを弾いた！

放たれたビームはオーガを完全に貫いた。

「ぐおおおおお！！！」

うめき声と共に、オーガは消滅した……と思われた。

しかし、これまでの敵とは全く違う状況が訪れた。

「パリンツ！」と言う音と共に地面に何かが落ちた。

そして、出てきたのはUSBメモリのような形状のものだった。

またそれと同時に、黒服に骸骨の模様があしらわれた服を着た男がオーガの鎧から現れた。

「何なんだ、一体。この男とこの壊れてる奴は・・・」
壊れたUSBメモリのようなものをユウスケは拾った。
変身を解いた海東から、重たい口が開かれた。

「この世界が一体何の世界なのかは断言できない。でも一つ言えることはこの世界の悪も

大シヨッカーと同じで世界を行き来できて、それでいて尚且つ、強力な力を持っていることだ。」

本人いわく、士よりもずっと前から通りすがりだったため彼の方が知識は深かった。

「だからおそらくこのメモリは仮面ライダーWの世界の物だと思われる」

「Wって、あの緑と黒の仮面ライダーか？」
海東は頷いた。

「大体分かった。この世界も大シヨッカーと関連がありそうだな」とすると4人とは違う声で、誰かが話に入ってきた。

「あんたが仮面ライダー・・・ディケイド。世界の破壊者だな・・・」

横を見ると、先程オーガに散々にやられてた龍騎だった。

龍騎はドラグセイバーを両手に握りしめ、士へと矛先を向けた。

「どうやらずいぶん傷がついてるらしいな。そんなんで戦っても俺には勝てないぞ。」

それに俺は世界の破壊者だったが、今はもう違う。」

小さい小石を拾った士は、大きく振りかぶって龍騎に投げた。

こつんと顔面に当たり、ぱたつと倒れる龍騎だった。

第二話 ライダーの世界1

小石ごときで倒れた龍騎の変身を解かせ、写真館へと運びこんだ。

「うづつ・・・いててて、はっ！ここは？」

「目を覚ましたようだね。ささ、コーヒーでも飲んで」

龍騎の変身者である青年は目を覚まし、辺りを見渡した。知らない顔ばかり並んでいた。

「話を聞かせてもらおうか。俺が破壊者だと、誰から聞いたんだ？」

向こうの部屋から、門矢士と海東大樹が現れ、士が青年に聞いた。自己紹介もなしに話を始めるのは、無礼だと思ったのか青年は口を開いた。

「その前に自己紹介しないと。俺の名前は城戸シンジっていいます。シンジはカタカナです」

「俺は門矢士。で、さっきの質問だ」

一拍置いてシンジは、口を開いた。

「そのことなんですが、こんな話信じてくれないと思うんですけど、この世界の人間じゃ

ないんです、俺は。ある日急にある男によって、俺はこの世界に来てしまったんです」

そのある男とは、大体目星がついていた。鳴滝、彼しかいないと士はふんだ。

「その男に、世界の破壊者ディケイドが私の世界に来ると、ディケイドの侵略から守ってほしい、

自分の力だけでは足りないと、そう説得され俺はこの世界に来た、ということですよ」

「じゃあ鳴滝さんが、善を装って、この世界にライダーを集めたということだね、でもなぜ

敵と戦っていたんだい？ライダー達とショッカーは今現在仲間ではないのかい？」

「最初はそうでした。鳴滝が束ねる他の世界のライダー、そして鳴滝が引き連れていた悪の残党。彼等は互いにあなたを倒すために手を組んでいました。でも、他の世界のライダーは皆、

考え方が一人ひとり違う。ライダー同士の争いを拒むものもいれば、ディケイド倒しの手柄を

自分のものにしようとするもの、もちろん鳴滝に従う物もいました。それでバラバラになって

鳴滝は、はむかったものに対して怪人を送り込んできたんです」

「大体分かった。どうやら今回の敵は最初から、しっかりと核心がつかめてるらしいなあ。

そうとなればあとは、鳴滝を倒すだけだ。行くぞ、海東、ユウスケ」

「でも待つてください！」

玄関を出ようとした三人に対して、回り込んで三人をとめたシンジ。「鳴滝を侮らないでください。彼はあなた達が想像してるよりも遥かに強いです。

その力で、ライダーが何人死んでしまったことか・・・」

「そんなに強い力を持つているのか!？」

さすがの士も驚きを隠せなかった。静かにうなづくシンジ。

「彼はここ最近、新たに生まれたライダーの世界に行きました。そしてそこにあるガイアメモリを

使い、ありとあらゆる力を手に入れたんです。そして彼は様々なライダーの世界の記憶を利用して

その世界のライダーや、その世界の悪を模造していきました。

彼はそれを利用して、本当に

あなた達を倒すつもりです」

士、海東、ユウスケ達の顔がこわばると、静寂に包まれた写真館だった

第二話 ライダーの世界2

「ひとまず、ここにいるだけでは何の解決もできない、土、行く」

やけに熱が入っているユウスケは、熱いまなざしで土に言った。

「ああ、その通りだな。シンジ、案内してくれ」

「ええ〜！どこにですか？」

驚いた様子で、土に聞いたが、当然の如く土は言った。

「鳴滝の場所にだよ。早く案内してくれ！」

「それが分かれば、俺だって戦いに行ってますよ！分からないから目の前の敵を

倒すしかできないんですよ・・・」

シンジは拳をつくり、自分の右太股をた叩いた。

「だったら目の前の敵を倒していくべきじゃないのか？敵を倒して、居場所を

つかめば問題ない。行くぞ、海東、ユウスケ」

二人は頷き、玄関のドアを開け、再び戦場と化した街へと歩みを進めた。

三人の後ろに隠れるようにシンジもついていった。

「ははは・・・ついに来たかデイケイド！貴様のために、各世界から怪人どもを集めた

新生大シヨツカーを作り上げたぞ！！はっはっはっは！！」

鳴滝は高らかに笑い上げ、怪人に両わきを囲まれるように、玉座に座っていた。

「ううっ・・・助けてください！！！」

ぼろぼろの布をはおい、顔には泥がたくさんついた男が、土に向かっ
てきた。

「向こうに怪物が・・・この世界はもう・・・」

「心配するな、俺たちが救ってやる。行くぞ！」

男に案内されたのは、鉄パイプが散乱し、重機が置かれている倉庫
だった。

「一見、怪人たちが見当たらないんだけど」

海東は辺りを見渡した。確かに目に入ってくる景色には、怪物達は
見当たらない。

「ここにいるぞ！！」

海東が振り返った瞬間、先程の男が海東を殴りつけた。

男はけだものを見るような眼で、海東を見て笑いだした。

「まんまと引っ掛かりあがって・・・それでも仮面ライダーか？」

「貴様は一体誰だ！？」

「戦ってみれば分かるかもしれないなあ。やるか？」

士は早速ライドブツカーから、カードを取り出して、自分の胸の前
にかざした。

続いてシンジ、ユウスケと。

ゆっくりと立ち上がった海東も、背中についた土をほろいながらド
ライダーを取り出した。

「ほう・・・やるのか・・・なら俺もだ」

男が取り出したのは、先程のオーガ同様、シンジが言っていたガイ
アメモリだった。

メモリには「OHZYA」と描かれている。

「イーツ！」

ショッカー戦闘員のコスチュームになった男は、ガイアメモリを手
に差し込んだ。

すると次第に、コスチュームが仮面ライダー王蛇の甲冑に変化して
いった。

「あれが、王蛇の記憶ってわけか」

「そのようだ、まずはコイツからだ。変身!」「変身!」「変身!」「変身!」「変身!」

四人の一斉変身が始まる。それぞれが仮面ライダーとなった。

「ほう・・・なかなか豪華なメンツだな・・・」

首を一回転させたと同時に、重機の影からコブラ男、コブラ怪人、

コブラの蛇怪人が

四人を囲むようにして現れた。

「蛇三昧ですね。行きましょう!」

龍騎は王蛇へ、クウガはコブラ男へ、ディエンドはコブラへ、土はコブラ怪人へ向かって行った!

第二話 ライダーの世界2（後書き）

コブラ男は、仮面ライダー一号の怪人です。

コブラ怪人は、仮面ライダーBLACKの怪人です。

コブラは、仮面ライダーTHE FIRSTの怪人です。

第二話 ライダーの世界3

激しい戦いがそれぞれに繰り広げられていた。

「はあっ！」

コブラ男の胸部に、クウガはパンチを決める。飛ばされるコブラ男。続いてデイエンドが、高速移動で背後に周り、背中を蹴り飛ばし前のめりになる敵を

さらに回り込んで、腹部を蹴り、飛ばされて重機にぶつかる。

デイケイドは余裕の様子で手をパンパンとたたき、拳を勢いよくぶつける。

自分の後頭部の触手を自ら取り出し、デイケイドめがけてふるう。それをデイケイドはかわし、ライドブッカーソードモードで斬りつける。

「うわあっ！くはあっ！」

優勢の三人とは正反対に、大きく劣勢をとる龍騎がいた。

王蛇のベノサーベルが、龍騎の装甲を切り裂く。と同時に火花が散る。

完全に追い込まれている龍騎。

「ATTACKRIDE ブラスト！」

デイエンドの光弾が、龍騎へと迫る王蛇をとらえる。

「ありがとうございます！っしやあ！」

「ソードベント！」

ドラグセイバーを振りかざし、ベノサーベルとの激しいぶつかり合いが始まった。

「シンジ！もう俺たちは決めるぞ！」

「FINALATTACKRIDE デイデイデイケイド！」

「FINALATTACKRIDE デイデイデイエンド！」

十枚のデイメンションゲートがデイケイドからコブラへと連なる。

そしてライドブッカーを振り下ろすと、強烈なスラッシュが放たれ

た。

続いてディケイド同様、ディメンションゲートが連なる。ドライバーのトリガーを引いた瞬間、ディメンションシュートが放たれる。

クウガは飛び上がり、コブラ男の腹部にマイティキックを放った。

「ぐはああああっ！」

三匹の怪人が大爆発をすると同時に、ガイアメモリが体から放出された。

煙を上げて、ガイアメモリは破壊された。

「やっぱり複製怪人は弱いな。本物より」

「あとは龍騎だけだ。。。。」

未だに劣勢の龍騎。いくら複製とはいえ、ライダーの記憶を持つメモリは強力らしい。

「俺が王蛇を食い止めます！皆さんは早く次の場所へと行ってください！」

この場所は俺が守ります！またいつか会いましょう！」

そう言つて、龍騎は激しい戦火の中へと向かっていった。

「龍騎、絶対に生きてろよ！」

第三話 来訪者

龍騎は今頃どうしているだろうか。考えるたびに悪寒がしていた。海東の説明いわく、ガイアメモリはあらゆる記憶を司っていて、それを使用した人間は怪物と化してしまう。また副作用性が激しく、著しく発達した身体に莫大な影響を及ぼす事も少なくないという。いわゆる麻薬のようなものだった。

「ここは一体？」

「さつきは瓦礫の街並みが続いてたのに、今度は嘘みたいに無事だ・・・」

煉瓦の家々が連なっていて、豪勢な街並みがそこに広がっていた。しかし、不自然なことが一つあった。それは人である。

この街に入ってきてから、この街の人間を誰一人として見ていない。

「静寂が、逆に妖しいですね・・・一体何なんでしょうか」

「さあな、でも調べてみるよりは、戦ってみた方が早い。来いよ！」

既に土と海東は気配を察していた。土の声と同時に、家の屋根や壁の裏から多くの人々が現れた。槍や刀を持ち人々は土達に矛先を向けた。

「お前ら、ディケイドやな！わかつとるんや！この世界まで破壊しに来たんか！」

武装集団の一人の関西弁の男が、土達に言い放った。

「ふん・・・そんな事俺たちにも分からないぜ。ただ今回は大分物騒だな。行くぞ」

「うん。早く王鬼の存在を突き止めないとね」

「だからこんなところで立ち止まってちゃいけない。そうだよな、士」

ユウスケがそう言うと、三人は武装集団へ走り出した。人々の波も

士たちとまじりあった。

士達は丸腰で男たちの攻撃をかわし、次から次へと男たちを倒して行く。

やはりライダーになるものと、一般人の違いだろうか、明らかに強さに違いがあった。

勝負は見えたように思われた、しかしそこにある一声が放たれた。

「お前ら、止める」

「この声は……斬鬼さん！」

集団の人間達が声の方へと振り向く。するとそこには弦楽器のようなものを持つ男が

レンガ造りの家の屋根に堂々と立っていた。

「斬鬼？確か……響鬼の世界の時にいたような……」

かすかに覚えていた記憶を取り出し、ユウスケは言った。

「響鬼。そんな奴俺は知らん。そんな事より、お前がデイケイドか？」

「そうだ。ついでに世界の破壊者だ」

「そうか……。だが思ってたのと違うな。もっと悪魔のような

男だと」

「俺は全てを破壊する悪魔だ。間違えてはいないな。だが、誰からそれを聞いた？」

すると男は上がっていた屋根から飛び降りて、士たちの元へと歩み寄ってきた。

「鳴滝だ。鳴滝と言う者が、俺をこの世界に呼び寄せた」

鳴滝……。やはり彼の仕業だったのだ。

「大体分かった。今鳴滝はどこにいる？」

「分からん。だが奴に今戦いにいっても負けるだけだ。止めておけ」

「ふん。どうだかな」

すると一人の男が急いで士達へ走ってきた。その顔には涙がこぼれおちていた。

涙が垂れたことにより、泥にまみれた顔に一筋の線ができていた。

「ば、バケガニが現れて、兵士二人を殺しまし・・・」

しゃくりあげて泣いているため中身が一部しか聞き取れなかった。

「バケガニか・・・。行くぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412o/>

仮面ライダーディケイド ~THE NEXT DECADE~

2011年10月8日02時35分発行